

Title	わが畫歴の一節
Sub Title	A chapter of my life as a painter
Author	守屋, 謙二(Moriya, Kenji)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1963
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.14/15, (1963. 1) ,p.89- 95
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	西脇順三郎先生記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00140001-0089

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

わが畫歴の一節

守屋謙 二一

ときどき私が下手な繪をかくものだから、編集者はその下手な繪について何か書けという。こういう註文はわれわれ素人にはそうあるものでないから、喜んでお受けすることにした。子供のときは誰しも繪をかきたがるもので、私が小さい頃から繪がすきだつたといつても特別の手柄とならないであらう。けれど、わが畫歴を話すとなればその頃に溯ることはやむを得ないであらう。

私は中部地方の或る小さな城下町で生れたが、ささやかながら市中の、しかも土藏が建ち並ぶ商家に育つたから、直接に田園風景に接することは稀れで、自然といえは中庭の松や竹や八ツ手の植込みによつて味わわれる位のものでつた。自由畫などという新しい藝術教育もまだ行われなかつた時代だから、小學校では毛筆畫の教科書によりお手本どおりに繪をかかされたが、六年頃になると寫生が始められ、思いのままの對象を選ぶことができた。しかしその場合も私は自然の景色には中々親しめなかつた。事實、郊外の田圃へひとりで出ていつてスケッチする勇氣はなかつた。町なかの景色とてなくはなかつたが、黒ずんだ瓦葺や格子戸の町家や川岸の柳などは美しいと思わなかつた。そんな譯で風景は苦手で、どうしても靜物に赴くこととなつた。宿題が出たとき選擇に困つて祖母と相談し、やつと鮭の頭を寫生することに決め、荒目のワットマン紙に水彩畫でかいた。先生から大變ほめられたことを記憶している。明治初年に

おける洋畫の先覺者、高橋由一には有名な「鮭」の傑作があり、後年になつてそれを知つたとき特別の親近感を覺えたが、それにはこういう思ひ出があつたからでもある。

郷里で中學校へ進むと、私の繪に對する關心は急に高まつて來た。當時の學科には圖畫といつて水彩畫と用器畫との二つがあり、それを私たちは、若いときアメリカで皿洗ひして苦學したという先生から習つた。その程度がどんなだつたかは知らないが、田舎の學校の割に劣つていたとも思われぬ。というのは圖畫室という特別教室があり、そこには石膏の彫刻や美術の書物が集められていたが、その中にはロンドンで發行されて當時は世界的に著名だつた美術雜誌 *Studio* が毎號その雄姿を表わしていた。その大判の厚ぼつたい假綴の本の中には多數の美しい着色や黑白の圖版があり、どれも眼を見はるものばかりだつた。英語の本文は讀める筈がなく、どんな内容だか知るよしもなかつた。いまから思うとイギリス流の保守的雜誌で、もう既に印象派などの近代美術に關するものが載つていたに違ひなく、またラファエル前派の畫家や、世紀末的なセンチメンタルな線畫のピアズレーもあつたように思われるが、しかし子供ごろに最も印象深かつたのはやはり一般の寫實的なアカデミズムの作品であつた。圖畫の先生を中心に「洋畫研究會」というものが作られ、會員たる生徒の製作について批評を聴くことができた。私も早速これに入會したが、そうすると雜誌 *Studio* を家へ借出す特權が與えられていたからでもある。西洋美術に對する私の最初の開眼がこの雜誌であることを懐しく思つてゐる。

その頃の田舎の中學校で西洋畫をかくといえは専ら水彩畫で、古くは三宅克己や、また大下藤次郎、石井柏亭などの畫風が行われていた筈であるが、低學年ではまだそういう作家について明確な認識はなく、ただそれらしいものを眞似ていたに過ぎない。中學校では私など町の出身のほかに近村からも通學する生徒が多く、それらの中には瑞々しい田園の風景をかき研究會でもほめられた者があり、こういう題材にかけては私など到底及ばなかつた。私はそれ故に益々靜物畫に傾き、花や果物を試みたが、特に興味を惹いたものの一つに兜があつた。こういう類は、昔の士族であつた、母方の祖母の家でみつけておいたものである。水彩畫のほかにパステル畫をやることもあつた。おそらく油繪がかきたかつたのだろうが、何分田舎のことでもあり、手ほどきを受ける洋畫家もいなく、また材料にしても入手が甚だ困難だつたためである。また複製以外に本物の油繪を見つるという機會さえ殆どなかつたといえよう。しかし當時における田舎の封建的な生活環境からすると、こういうあくどい洋畫のマチエールは事實上、私たちの感覺にはいりこむ餘地がなかつたであ

伊能山崎集

謹啓



守屋教授作 「山百合」

る新しい建築運動の最初の現われである「分離派」の優れた建築家となり、最近では飯田橋の厚生年金病院その他の設計者として常この方面の先端をゆく山田守氏があつたことも一つの奇縁である。

この田舎の中學校の一部の生徒には當時として想像もつかぬ位の「新しがり屋」の分子があり、それはむしろ文藝を主とするもので、詩や小説の廻覽雑誌を作っていたが、それに附隨して美術にあつても無暗と新しいものが求められ、立體派だとか未來派だとかいう生まましい新造語を口にして論じ合つたものである。私は文學よりは、手つとり早い美術に一層の興味を持つていたから、その方面でこの仲間に加わつた。皆がそろいの赤いトルコ帽をかぶり、夜蔭に乗じて天主閣の聳える公園の一隅に集まり、それから町には一つしかなかつた西洋料理屋へ繰りこんだことを覽えている。尤も一方でこういう風に生半可に現代美術を齧つて不満に思ひながら、しかし他方ではそれを十分に補つてくれたものがあり、いうまでもなく竹久夢二の繪である。甘つたるい、しかも多分に郷土的情調のある詩文や挿繪の畫集を次々に出して天下の少年少女を魅了したこの獨異な作者が私の田舎にまで浸潤したことは勿論である。私も廻覽雑誌のために夢二ばりの變な挿繪をかいたことを告白しなければならぬ。

中學校の四年生頃からは私の關心というか、生活態度というか、がらりと一變した。それは宗教、進んでは哲學に向い、大變に抽象的でむつかしいことが好きになつて來たが、ここでは觸れないことにしよう。そんな年月が三、四年續いて、塾の文學部に入學したときには哲學と獨逸語を勉強するのが目的であつた。田舎から都會へ出て來てはその生活環境が全く變り、何分まだ感受性の強い若者のことだから、見るもの聞くものが刺戟的であつた。しかし東京という都會を直ちに享受する氣持にはなれなかつた。という譯は、私はむしろ京都を中心とする上方文化圏に育つた者だから、それと比較して關東の文化にはいつも批判的であり、殊に日本の古美術の遺構が餘り少ないには淋しい思いがした。永井荷風は「日和下駄」という東京風物散文詩の中で芝山内や上野や淺草などの江戸時代の寺院建築にすつかり陶醉していたが、私はそれを讀んでおかしくなり、淺草觀音などの、あのごわごわした屋根の曲線や、重苦しい軒下の組物や、とりわけあのどす黒い朱塗の色は、上方のそういう建築美と比べて甚しく野蠻で没趣味に思われたからである。それよりもむしろ下町にある問屋筋の土藏造りの家並には感心することが多く、こういうのが江戸文化の名残かと思われたが、勿論、田舎のぼつと出の私には到底そういう世界に深入りすることができなかつた。歌舞伎を見ればもつと直接にいわゆる江戸趣味が味わわれたかも知れないが、これまた當分の間は私の性に合うものでなかつた。東京の、しかも塾の學生となりながら私の一番に慰安となつたことは郊外の散歩であつた。いい換えれば武藏野の自然の美しさであつた。都會にあつて始めて自然の景色の立派さに見とれたことは一種の皮肉だが、上述の私の子供のときの生い立ちを考えれば肯けなくもないであろう。もう一つの理由には、私の郷里なる濃飛平野や、一般に關西の景色は當時にはまだ優れた自然美として受取るまでに至らなかつたからである。それにしても東京郊外の田圃は素晴らしい。私は主として澁谷界限に下宿していたが、その頃はまだ一寸出ると田圃や農村があり、大きくカーブを描いた丘の線や、それを一面に被う麥畑や芋畑の線の數物、無限な蒼空や、そこに浮ぶ雲の群、更に原始そのものの土の色など、私はそういうものを眺めて楽しむばかりでなく、繪にかこうとする意欲に燃えるに至つた。

この頃の大きな喜びの一つは初めて各種の美術展覽會が見られたことである。秋になると美術のシーズンで、二科、院展、文展と開催されたが、今とちがつてその數も極めて少なかつたから、實に熱心に見物したものである。殊に二科の洋畫が一般に私の心を惹きつけた。展覽會で鑑賞を高めることができたほかに、書物や複製を通じて次第に西洋美術の知識に親しむこととなつた、當時、丸善の洋

書部の書棚はわれわれ文科學生の撞れの的となつていたが、私もその一人であつた。こうして美術書をぼつ手に入れた。高價なものだから、やりくりで苦心したが、餘り翻譯がなかつた當時のことで、それが必須條件でもあつた。先ずミレーが好きになり、英語の傳記を繙いた。ゴッホはその手紙を獨譯で讀んだ。ほかに澤山に西洋の畫家を知るに至つたが、しかし特にこの二人が選ばれたことはその藝術の背景にある文學的、宗教的魅力が大きかつたためと思われる。

かようにして私はいよいよ繪をかくことに熱心となり、學校の休みには油繪の道具を擔ぎ、その頃まだ電車もない三軒茶屋から二子玉川の方面へと歩き廻つて田園の景色を寫生した。ただ私は本職の畫家になる希望を持ち合せなかつたせいか、師匠について技法を學ぼうとはしなかつた。むしろそれを避けたい氣持であつた。それだけに極めて幼稚な作品ばかりが出来上つた。澁谷の近郊について私が畫題を求めたところに芝浦の埋立地がある。當時、三田から塾生はよくこの埋立地まで歩いて海を見にいつたものである。そんな譯で私も寫生に出かけていつたが、ところどころに小さな工場がある位で、あとは雜草が一面に茫々と生え、そのかなたに對岸の房總半島や更に左方には東京の濁つた空を望むといつた一種異様な近代風景でもあつた。私は一度その草原に青色に塗つた電車の壞れたのが棄てられてあるのを大變面白く思い、ゴッホのような氣持でこれを寫生したが、畫時になり辨當を出して食事にとりかかると、近くの工場から炊事婦のようなおばさんがお茶をわざわざ運んでくれ、思いがけぬ好意に全く頭がさがるのであつた。後年になりドイツ滞在中、あの陶器で有名なエルベ河畔のマイセンの古い町でスケッチしていると、私の繪を見に集まつた人々の中の一老媪が梨の實を食べるといつてくれたが、こういう素朴な人情味は繪をかく者のみが味う實際の特權であらう。

學生時代に見た展覽會の中で最も感銘を受けたのは、當時、赤坂溜池の三會堂で何回かを重ねていた草土社のそれで、岸田劉生を盟主とするものであつた。近郊の切通しの坂道のむくむくした赤土に草の茂みをあしらつた圖や、林檎や陶器を克明に描いた靜物畫や、手に花を持つ肖像畫などはこの一派の皆が試みて嫌味さえあつたが、さすがに劉生は斷然ずばぬけていて、殊にデッサンの線の鋭さには追隨を許さぬものがあり、その頃、日本の洋畫家の中で一番に指を屈するとすればおそらく彼であらう、と考えられたほどに深く私は彼に傾倒するに至つた。本科になつて一學期のことだが、東京の都會生活が飽きたりなく、早くから夏休みの積りで郷里へ歸り、揖斐川の上流に臨む山麓の田舎の友達の家、後には更にその奥の或る禪寺にあつて繪をかいた。尤も當時、私はスピノーザの哲學にも

興味を持ち、レクラム版の「エティカ」を耽讀していた。こんな譯で繪畫一本になることは決して許されなかつたが、これはまた私の一つの宿命でもあつたらう。劉生の藝術が北歐ルネサンスに溯ることを知り、先ず私はデューラーの作品を勉強したく思い、銀座の友人S君に頼んで丸善から買つて貰つたこのドイツ作家の畫集を草深い禪寺の一室でどんなに見入つたことであらうか。とにかくその直接の眞似事か、寺の縁側へ遊びに来る百姓の小娘たちと親しくなり、その一人一人の肖像を素描したのだが、遙か都會の雜踏を離れてこういう人煙稀れな山里で見える人間の顔は美醜を超越して一つ一つが尊いものであることを知つた。

この夏の田舎の滞在で繪の數も少々たまつたから、秋に歸京すると、これをどうしても劉生に見て貰つて批評を仰ぎたいと思つた。紹介する人がなくもなつたが、私は無遠慮に手紙を出したら、懇ろな返事があり、早速に鶴沼の畫室へ来るようにとのことであつた。最初にお訪ねしたときには武者小路さんも來遊されていたが、何分、口が重くて若年の私のこととただ黙々として片隅にちぢこまつていたように記憶する。しかしこれで私は一應劉生門下になつた譯だから、その後は屢々訪ねていつた。當時、氏の製作は益々高潮點に達し、殊に令嬢をモデルにした「麗子像」や「村娘圖」の數々の傑作は藝術愛好者にとり嘗て味わえなかつたほどの驚異的となつた。氏の畫室にあつてこれらの作品が出來上がつてゆく過程をつくづくと見守つたことは私の一つの尊い思い出である。その頃、七、八歳の麗子さんの褪朱色に着古した疋田鹿子の衣裳を丹念に描きながら、「こうして絞模様の一つ一つを描くことは大きな勞苦だ。繪かきはそういうことを忍ばねばならぬ。」と氏は脇の私に向つてつぶやくのであつた。

この稿を執筆中に折よく東横畫廊で「麗子像」と「村娘圖」だけの數十點を並べた特別回顧展があり、私も今更懐しく追憶を新たにすることができた。數ある「麗子像」の中では一九二〇年、二一年の作がやはり最も新鮮でオリジナリティーにも富んでいるように思われるが、それは丁度私が劉生の門を敲いた時期に當つている。有名な「劉生繪日記」の中には慶應の學生たる私のことが出て來るが、この日記は一九二二年以後に書かれ、私はもう殆どゆかなくなつてからのことである。どうしてゆかなくなつたかといへば、元來私は繪にそれほど熱中できなかつたためと、もう一つの理由には、劉生はいかにも生拔きの江戸子の粹人で、長唄をやつたり、歌舞伎に凝つたりして、そういう趣味になると田舎者の私には到底ついてゆけなかつたためである。かような彼の傾向はやがて一層發展して、初期肉筆浮世繪の美的發見者となり、或いは油繪で濃厚な芝居繪をかいいたりしたのである。

ところが劉生には他面において根深い支那趣味、文人趣味があり、白樺派にしては珍らしく立派な書をかき、水墨畫の實にユニックな優作を残したが、こういう傾向が益々顯著になつて來たのは私がいつていた頃のことと考えられる。私はもつと後になり家庭をもつてから南畫めいたものを餘技的にかくに至つたが、幾分なりと畫伯の影響を受けたとすればこの方面においてであろう。またそれを大變に感謝している。

私の畫歴も學生時代における遠い昔の物語で與えられたページを充たしたのである。(五八・四・二二)

(論文執筆を私は病後のために辞退していたのであるが、「前に書いたものでも短いものでもよいから記念のため是非載せるように」との西脇先生のお言葉に甘えて私は数年前『三色旗』第一二三号のために書いたこの旧稿で間に合わせていただくことにする。)